

月本 昭男 ほか 著 ほか 編

『ここが変わった！「聖書協会共同訳」旧約編』

(日本キリスト教団出版局、2022年)

長井 隆児
NAGAI Ryuji

本書は、聖書協会共同訳（2018年）における旧約聖書の翻訳の特徴を伝えるために、新共同訳や新改訳2017との違いを示しつつ、様々な関連分野の学問の成果を紹介するものである。そこでは、『聖書 聖書協会共同訳』の読み方（『信徒の友』2020年4月号～2021年3月号）という連載で紹介された12の解説文を基本にしつつ、さらに15項目が扱われている（3-4頁）。本書には27の論考が収録されているが、ここで全てを紹介することはできないため、10名の執筆者たちの論考を1本ずつ、すなわち、計10本を紹介する。

島先克臣氏は、創世記1章27節の翻訳に関して説明する（10-15頁）。新共同訳で「神にかたどって」と意識されていた部分は、聖書協会共同訳では原語に近い「神のかたち」となっている。古代メソポタミアの王たちが自らを「神の像」と称していたことがわかってきた。これは、神の代理として社会正義を国内に実現する存在であることを意味する。この「像」（ツァルム）はヘブライ語では「ツェレム」であり、創世記1章27節で「かたち」と訳されている語になる。「神のかたち」人が創造されたとするこの箇所は、王のみならず、人類全てが神の代理として正義によって世界を治めるためにつくられたことを示す。「神のかたち」は新約聖書のキリストの救いとも関わり、このことはキリスト者全員に生き方を問いかけている、と島先氏は述べる。

本間敏雄氏は、創世記3章8節に関して以下のように解説している（16

-20頁)。新共同訳で「アダム」と訳されている語は、聖書協会共同訳では「人」と訳されている。この箇所は「人／アダム」が神の戒めを破り、善悪の知識の木の実を食べた後の描写である。ヘブライ語の「アダーム」を固有名詞「アダム」と訳せば、不信仰な行いがその特定の人物に起きた歴史的出来事となる一方で、「人」と訳せば、人間一般の普遍的な罪（原罪）であることが強調される。聖書協会共同訳では、後者の理解が採用されている。他方で、創世記3章15節では女の子孫が蛇を砕くという救いの希望が示されており、この福音理解はパウロに受け継がれている、と本間氏は述べる。

小林進氏は、出エジプト記10章4節などについて評説する（24-29頁）。これまで、「いなご」と訳されてきた原語のヘブライ語とギリシア語は聖書協会共同訳において「ばった」と訳されるようになった。いなごは、聖書の舞台となる地域には生息していないからである。他方で、旧約聖書には「ばった」に対応する語が複数登場する。ゆえに、数種類の「ばった」が存在するのだが、それを同定するのは難しい。旧約聖書のギリシア語訳である七十人訳聖書では、翻訳者がヘブライ語の多様さに応じようとしていたさまが垣間見えるが、必ずしも訳語が一貫しているわけではない。

池田裕氏は、列王記下11章20節について説明している（57-60頁）。20節の「国の民は皆喜んだ」に続く文は、これまで「町は平穏であった」と訳されていたが、聖書協会共同訳では「都は静まり返っていた」となっている。動詞「シャーカーター」は「平穏であった」とも「静まり返っていた」とも訳せるため、接続詞「ヴェ」を「そして」と捉えるか、「だが」と捉えるかが新共同訳と聖書協会共同訳の違いとなる。聖書協会共同訳の場合、「国の民」は、篡奪者アタルヤの支配が終わり、喜んでいるが、その支持者が町に残っているため、不安と恐怖に息をひそめて静まり返っていた、という意味になる。

高橋洋成氏は、列王記下23章29節について解説している（61-64頁）。従来の解釈によれば、エジプト帝国のファラオ・ネコがアッシリア帝国と戦うためにカルケミシュを目指して進軍してきた時、ヨシヤ王はメギドでエジプト軍を迎え撃つも、呆気なく戦死した。だが、バビロニア年代記による

と、ファラオ・ネコのカルケミシュへの進軍はバビロニア帝国と戦うアッシリア帝国への加勢のためであった。恐らく、ファラオ・ネコに従軍を求められたヨシヤ王はそれを承知したのだが、ヨシヤ王による南ユダ王国の改革を見たファラオ・ネコは彼が裏切ると見て、彼を殺害した、と考えられる。この解釈に基づけば、ヘブライ語の前置詞「アル」が使われている句は、新共同訳で「アッシリアの王に向かつて」と訳されているが、「アッシリアの王のために」と翻訳した方がよい。また、ヨシヤ王はファラオ・ネコを「迎え撃とうと」したわけではなく、「彼と会うために」出て行ったことになる。ただし、聖書協会共同訳では、この解釈は脚注で紹介する形になっている。

飯謙氏は、詩編 8 編 2 節に関して解説する (79-82 頁)。飯氏は、原文に注目し、関係詞の「アシェル」と意味が不確定の「テナー」という 2 つの語のこれまでの解釈を紹介し、このつながりがいかにわかりにくく、翻訳者を悩ませてきた部分であるかを述べている。聖書協会共同訳では、「アシェル」が関係副詞的に機能する稀なケースとして、詩編 8 編 2 節を理解し、「主よ、我らの主よ／御名は全地でいかに力強いことか。／あなたは天上の威厳をこの地上に置き」と訳す。詩編の作者は「地」の直後に「アシェル」を置くことによって、自身の考えが覆された驚きを表現したという。飯氏によれば、それは、神の「威厳」が天上にあり、地上の人間とは切り離されて無関係だ、という考えを覆された驚きである。

石川立氏は詩編 23 編について説明している (83-86 頁)。1 節の新共同訳で「主は羊飼い」と訳されていた箇所が聖書協会共同訳では「主は私の羊飼い」となっている。これにより、原文の正確な訳になるとともに、「主」と「私」の親密さが明確に表現されることになった。そして、2 節は、新共同訳で「憩いの水のほり」となっていたところが聖書協会共同訳では「憩いの汀」と訳された。詩的な語「汀」は、羊飼いによってねんごろに用意された特別な場所というイメージを創出する。6 節は、新共同訳で「主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」となっていた箇所が聖書協会共同訳では「私は主の家に住もう／日の続くかぎり」と訳された。新共同訳では「帰り」が文中の他の語との結びつきがよくないため、「とどまる」と

いう動詞を補ってしまっている。聖書協会共同訳では、七十人訳ギリシア語旧約聖書の「住む」に合わせて、原文のヘブライ語の母音を変え、「住む」と訳している。これにより、神の庇護のもとに「住む」という理解を打ち出している。

小友聡氏は、コヘレトの言葉9章9節に関して以下のように述べている(98-100頁)。新共同訳の「太陽の下、与えられた空しい人生の日々／愛する妻と共に楽しく生きるがよい」に対し、聖書協会共同訳の「愛する妻と共に人生を見つめよ／空である人生のすべての日々を」という訳は大きく印象が異なる。新共同訳が「空しい人生」と訳したのに対して、聖書協会共同訳は「空である人生」と訳しており、人生が空しいというニュアンスがない。また、新共同訳が「楽しむ」と訳したヘブライ語の「ラーアー」は基本的には「見る」という意味であり、聖書協会共同訳は原文通りに訳している。そのため、コヘレトの言葉9章9節は、人生のパートナーである「あなたの妻と共にある人生を見つめて歩みなさいという建設的な勧め」(100頁)であり、結婚式で読まれるのに相応しい箇所である、と小友氏は述べている。

月本昭男氏は、雅歌1章5節及び、その他の箇所の問題のある表現に関して解説している(101-105頁)。雅歌1章5節の聖書協会共同訳の大きな変更点は、「黒いけれども」というこれまでの表現を「黒くて」に変えたことである。月本氏によれば、『黒いけれども』という訳文には『愛らしい／美しいのは白い肌であって、黒い肌ではない』といった、社会的につくられてきた差別感覚が暗黙の前提(101-102頁)としてあるという。この箇所で使用されている接続詞「ウェ」は文脈により「そして」の意味にも「だが」の意味にもなり得るが、キリスト教会はウルガータに基づく sed「だが」の理解を踏襲してきた。しかし、1960年代、アメリカのアフリカ系住民の間で「ブラック・イズ・ビューティフル」という標語が掲げられると、英訳聖書は and という訳を採用するようになる。古代に編まれた旧約聖書に差別表現が見られることは否めないが、そのような差別を克服しようとする視座もある。また、月本氏は、主に創世記における新共同訳の女性にまつわる不適切な表現を指摘しつつ、聖書協会共同訳に残された問題も挙げている。

大島力氏は、イザヤ書 53 章 11 節について説明する (106-110 頁)。大島氏によれば、聖書協会共同訳の大きな特徴は欄外に注が付されたことである。この注は、採用された翻訳が底本から外れる場合の「異読」、あるいは他の翻訳と解釈が大きく異なる場合の「別訳」などを示している。大島氏はその例として、イエス・キリストの到来を預言していたとされる苦難の僕の詩 (イザ 52:13-53:12) からイザヤ書 53 章 11 節の注 c を挙げる。中世 11 世紀初頭に由来するヘブライ語の底本に見られない「光を」という語がクムラン (死海) 写本と七十人訳ギリシア語旧約聖書にはあり、そのことを考慮して聖書協会共同訳では「光を」を補っている。「光を」を補うか否かは、イエス・キリストの苦難と十字架の意味を捉えるうえでも重要である。ダニエル書 12 章 3 節には「悟りある者たちは大空の光のように輝き／多くの人々を義に導いた者たちは／星のようにとこしえに光り輝く」という言葉がある。ダニエル書 12 章に関して、大島氏は、「イザヤ書 53 章の影響を受けつつ、光のイメージによって復活の希望を告げているのではないか」(110 頁) と語っており、聖書協会共同訳のイザヤ書 53 章 11 節はそのような解釈を可能にする。

本書は、聖書協会共同訳のこだわりを教えてくれる書物であるが、評者が特に言及しておきたい本書の魅力は次の 3 点である。1 点目は新約聖書との関連が多く言及されていることである。これは、新約聖書の解釈において重要な視座を与える。他方で、新約聖書の強調は、「ヘブライ語聖書」(旧約聖書のより中立的な呼称) という在り方を見えづらくする難点もあるため、慎重な議論が求められる(「ヘブライ語聖書」に関しては、長谷川修一『世界を読み解く一冊の本 旧約聖書〈戦い〉の書物』慶応義塾大学出版会、2020 年、7-9 頁を参照)。特に、キリスト教の教理を「ヘブライ語聖書」の翻訳に反映することの正当性や必要性は、常に問われ続けるべきだろう。2 点目の魅力は、少なくない論者が聖書協会共同訳に残された課題に言及していることである。上述の内容からも明らかのように、旧約聖書の翻訳は非常に多くの問題と向き合う必要がある。ゆえに、これからの聖書の翻訳で注意すべきことを提示する本書は貴重な財産になるに違いない。そして、本書の

書 評

3点目の魅力として、旧約聖書を原典で読む面白さをあらゆる読者に伝えようとしてくれていることが挙げられる。その開かれた姿勢は、ヘブライ語がカタカナで記されていることから示唆される。本書は、聖書の翻訳が一部の人たちの独占物であってはならないということに気づかせてくれるのである。

(本学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程)